みんなの童話

あの日の記憶

ぼくがまだ小学三年生のころだ。しんやと遊んだ日の帰り道、今日も楽しくなかったなあと思っていた。しんやはやりたい放題でぼくはいつもがまんしている。

「あっ、アゲハだ」

どこから来たのか、アゲハチョウがぼくの回りを飛び始めた。

数日前、家の庭でだっぴを始めたアゲハを見つけた。クモがすを作っている。ぶじに飛んでいけるように糸をはらった。そのアゲハがこっちにおいでよ、と言っているみたいだ。後をついて行くことにした。古い民家が見えた。げんかんの戸が開いていて、何のためらいもないようにアゲハが入って行った。

「いらっしゃい」

うす暗い中、女の人が座っていた。

「つとむ君ね。あなたに一つ、ある能力を授けたいの」

美しい声だ。どうしてぼくの名前を知っているのかな。ぼくが来るのを待っていたみたい。

「つとむ君はおとなしいから、友達からいやな目にあわされるのよ。今から風のあやつり方を教えてあげるわ。きっと、役に立つはずよ」

「ぼくのこと、色々と知っているな」

声がふるえた。

「ふふ、何でも知っているわ。しんやのこともね」

ますますこわくなった。

「あの、そろそろ帰らないと」

「待ちなさい。すぐ出来るわよ」

女の人が近づいてぼくのかたに手をおいた。黄と黒のきれいなドレスをまとい、くりくりした丸い目をしている。女の人は外に出ると、手を横にのばしひらひらと動かし始めた。

「風よ、あれくるいなさい」

ぐるぐると風がうずをまき始めた。こぶしをむねに当てると静まった。

「つとむ君、かんたんでしょ。覚えておくといいわ」

女の人はすっと家の中に入った。ぼくは一目散に家まで走った。

春の遠足。お弁当を食べた後、しんやがぼくの側に来た。

「おい、つとむ。これ、くれよ」

しんやがポテトチップスのふくろをつかんでいる。イヤだと言いたいのに言えなかった。とつぜん、アゲハが飛び始めた。黄と黒のドレスとくりくりした目の女の人を思い出した。

「風よ、あれくるいなさい」

試しに両手を伸ばしひらひらさせた。しんやの場所だけ風がぐるぐる回った。

「イタ、タ。目に砂が入った。何で急にここだけ風が吹いたんだ」

「くっ、くっ」

ぼくは、笑った。

それからも風を利用してこらしめた。風にたよるばかりでぼくは何一つ出来なかった。

「おい、つとむ。習字の道具、持てよ」

いつものしんやの命令だ。

「イ、イヤだ！」

ぼくはさけんだ。心臓がドキドキした。しんやの目が見開いている。

「もう絶対、がまんするもんか」

さらに声をはりあげた。しんやはだまったままだ。

「…、ごめん」

少しして、しんやがあやまった。

ぼくとしんやは何でもいいあえる友達になった。

あれから十年、あの女の人とは一度も会っていない。

しろやま会員　石川洋子